

馬來西亞首相マハティール閣下來訪の思ひ出

加藤忠郎

今を遡る二十年餘の平成八年二月二十五日、馬來西亞の首相マハティール閣下、同國のアドバイザーを務むる大前研一氏に伴はれ、予が當時専務を務めし東京都大田區所在の弊社を御忍びにて訪問せり。公式訪問に非ざるため、警視廳は制服の警察官にはあらで私服の警察官を要所要所に配備す。日頃より「ルック・イースト」を標榜せるマハティール閣下の訪問目的は、弊社の主力製品たる金屬プレス金型製作の技術移轉を求むることなり。首相より直々に弊社の技術を求めらるゝは名譽なり。プレス金型とは「プレス」と呼びながらはされたる壓力機械の主要部分に取附けるものにて、そこに主として金屬材料を自動供給して穴あけ、成形等を行うことにより、精密なる同一品質のものを大量且つ安價に製造出來得るやうにする、大量生産には不可欠なるものなり。

當日はマハティール閣下、大前研一氏、駐日大使ダト・カティブ閣下、同國産業界のリーダー六名以外に、首相の主治醫、侍從、警備員、その他總勢二十數名が大型バスにて到着。歓迎の挨拶の後、早速工場を案内す。マハティール閣下は大量生産に不可欠なる金型に強い關心を持たれ、途中何度も立ち止まりて我等に問を發せり。見學コースの最後に、圓管を自由自在に三次元に曲げ得る機械を見學したる際は、圓管の蛇のごとく出で來る様に閣下も大前氏も破顔大笑せり。

一行の來訪一週間程前、駐日大使ダト・カティブ閣下、事前の打合せのために來社され、予が應對す。同國專屬警備員による警備・安全上の問題等の外に、晝食及び食後の甘味に話が及べり。マハティール閣下の食されたき希望を問ふ。食は天婦羅蕎麥が所望の由、食後の甘味に就きては饅頭が好物なりと承る。毒見は不要の由に一安心す。萬一のことあらば「これ當に餡殺なり」と予祕かに獨り悅に入る。來訪の當日、依頼せし近所の蕎麥屋、普段冷凍の海老を天婦羅に用ゐるも此日は新鮮なる海老を仕入たりと聞く。饅頭は弊社會長自ら上野の老舗菓子舗に行きてこれを購ふ。閣下、天婦羅蕎麥も饅頭も美味なりと喜び。残りし饅頭を土産に贈呈す。食後、主題の技術移轉の話をする。馬來西亞にての工場設立の求めに對しては、當時弊社は泰國にて工場の立上げを行ひしかりなれば、馬來西亞にも工場を造るは無理なる狀況にして、技術者を派遣する等の技術援助ならば可なりと返答す。此に對する馬來西亞側の反應は、その場合萬一貴社が途中にて技術移轉を取止むることあらば困却することにならむがため、貴社の株式の三分の一の取得を許可されたと云ふものなり。其の申出でに關しては後日返答することを約す。新聞報道に據れば一行は弊社を辭去せし後は秋葉原の電氣屋街に向ひたる由。

後日緊急役員會を開催し馬來西亞側の申出に關し鳩首協議し、株式分與は斷ることと決

せり。外部の識者は、勿體無しと言ふ者、斷りたるが良かりきと言ふ者半々なり。後に新聞等にて、「マハティールの申出を斷りたる中小企業」として弊社有名になれり。

(平成二十九年三月二十二日受附)